

## 法海寺の概要

当寺は、愛知県知多市八幡字平井 19 番地に所在する。知多半島の北部、伊勢湾沿いと半島東部兵丘地との間に位置し、国道 155 号線と県道 24 号線の交差点堀切の南 500m 程、名鉄常滑線寺本駅より南 400m 程の所にある。

法海寺は、薬王山と号し、天台宗に属し、薬師瑠璃光如来を本尊とする古刹であり、中世から近世には天台宗薬上流の伝法灌頂の道場であった春日井市野田の密蔵院末に列していた。創立は、寺伝によれば天智天皇の代に新羅に渡ろうとした沙門道行が風雨に遭い、尾張星崎にとどまった後に一寺を創建したと伝える。その後、道行が天智天皇の病を治したことから、天皇より薬師如来本尊と薬王山法海寺の勅額が与えられ、山階清水庄を寺本庄に改めて田畑二百八十町歩が与えられたと伝えられる。

古代から中世までの寺院の歴史は明らかでないが、大正 3 年（1914）に平安前期の変形蓮華文軒丸瓦が境内から出土し、古代の寺院跡と推定され、昭和 33 年（1958）に奈良期の瓦が検出され、昭和 48 年（1973）には白鳳期の単弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦などが検出されたことから、創建は七世紀後半と考えられている。

寺院が文献に現れるのは、応永 3 年（1396）12 月 15 日付の大般若経六〇〇卷（如意寺蔵）の奥書に「於尾州智多郡額石保法海寺理性房書写畢秃筆金剛資定叡」とあり、これが記録上の初見である。また、「法海寺古絵図」（年代不詳）によれば、寺域には大乘院、吉祥院、常光院、実乗坊、理性坊、蓮華坊、山之坊、西光坊、日清坊、華光坊、新蔵坊、梅本坊の 12 坊（3 院 9 坊）が描かれ、これらが南北に長い法海寺の敷地を東西と北に二重に配され（内に 3 院 3 坊、外に 6 坊）、敷地奥の本堂（薬師堂）を門字型に囲い、本堂背後に華王院が描かれている。「張州雑誌」にれば「往古ハ十二坊有、中世以来漸々ニ衰微シ、今僅三坊有り、大乘院、吉祥院、常光院己上三ヶ寺也」とあり、12 坊が整っていたのは中世の早い時期であったのであろう。また、「尾張名所図会」によると塔頭寺院の内、常光院が文禄 2 年（1593）に榮源法印、大乘院が文禄 3 年（1594）に證永法印、吉祥院が慶長元年（1596）に龍運法印により中興され、三院とも薬王山を通称したとするので、近世初順にはすでに三院のみであったと考えられる。まもなく、慶長 5 年（1600）に九鬼氏によって一山を焼かれたとされる。その後、江戸時代に入って境内の諸堂が再建されたと考えられる。同名所図会には江戸後期の寺域が描かれており、境内の南前方に仁王門をおき、それより北に参道を延ばして本堂を構え、参道東側に大乘院、西側に吉祥院、常光院を配し、本堂西前方に十王堂、鐘楼、東前方に地藏堂、庚申堂、本堂背後に普賢堂、鎮守堂などが

配されている。

現在、境内には同名所図会に描かれた仁王門、本堂、地藏堂、庚申堂、十王堂、鐘楼などが奥深い参道に沿って建ち、楠木の巨木が参道を覆っている。南北中軸線上の正面に仁王門が建ち、その奥に参道を通して本堂を構えている。本堂は小規模な三間堂であるが、平成4年（1992）に前身仏堂に準じて江戸時代前期の様式によって復原されたものである。本堂の西脇に法善堂、土蔵、東脇に十王堂、地藏堂が前後に建ち、十王堂の前方に前から鐘楼、愛染堂、庚申堂が並んでいる。境内周辺は、法海寺の東側に大乘院、西側前方に吉祥院、その後方に福祉会館を挟んで常光院の三院が建っており、江戸後期の景観をよく保っている。古代の寺観は失われているものの、中世の鎌倉新仏教諸派の寺院とは異なる塔頭寺院に囲まれた古刹の趣を残している。

現在、境内の堂字の中で江戸時代の建物は仁王門のみである。仁王門の建立年代は、斗栱、虹梁などの絵様の様式から判断して17世紀中頃のものともみられていたが、仁王像の制作年代を示す木札に「(表) 上官伝太子宗流七拾二世 攝州四天王寺 藤原大佛師法橋 国見大新□長誉宗伝 (裏) 丙寛文六年 次男大佛国見左近 午九月吉日 京誉康盛造立」とあり、さらにこの度の修理により大斗から「寛文六年之比□奉加仕候而建立 仕候同九年七月□取掛申候 大乘院法印□運七十九弟子源祐□□ 吉祥院法印源栄四十六弟子鎮栄廿 常光院 祐海三十一」、木鼻から「仁王門 寛文九己酉天七月初頃□ 作事」とする墨書が発見されたことから、寛文6年（1666）から同9年（1669）頃にかけて造営されたことが判明した。

なお、鎌倉時代の紅顔黎色阿弥陀如来像、室町時代初期の仏画涅槃像、金剛界・胎蔵界曼荼羅図が県文化財に指定されている。